

Value-based medicineの推進に向けた循環器病の疾患管理システムの構築に関する研究

研究分担者 林 知里 兵庫県立大学地域ケア開発研究所
研究協力者 大江 理英、濱上亜希子 兵庫県立大学看護学部

研究要旨

地域における慢性心不全患者への療養支援および看護・介護実践についての調査はほとんどない。高齢慢性心不全患者の多くは介護保険認定を受けているため、訪問看護師やケアマネジャーなどの専門職がキーパーソンとなり、専門的な看護実践および悪化の兆候を早期発見することができれば、再発予防、重症化予防につなげられる可能性がある。しかし、地域で活躍する慢性心不全患者の高度実践ができる看護職は少なく、地域における慢性心不全患者の生活支援に必要な情報が専門職の間でも共有されていない。そこで、本研究では、地域で暮らし、介護保険サービスを利用している慢性心不全患者の療養生活の実態と看護/介護実践をケアプランおよび看護/介護記録から明らかにすることを目的とした。

A. 研究目的

地域で暮らし、介護保険サービスを利用している慢性心不全患者のケアプランおよび看護/介護記録から、看護職/介護職の日ごとの実践活動について分析を行い、療養支援の実態と今後の課題の抽出を行う。

B. 研究方法

機縁法にて、兵庫県の居宅介護事業所および訪問看護ステーション、通所介護事業所を選出した。協力者(事業所)には、慢性心不全につながり得る疾患(虚血性心疾患、心臓弁膜症、心筋炎、心筋症、先天性心疾患)を有する者および既に心不全の診断を受けている者を対象として選定してもらった。カイボケ(看護・介護記録の保管、保険請求ができるソフト)を用いて保管されているデータを事業所スタッフがパソコンの画面を見て抽出した。調査時に主治医意見書・指示書に心不全および慢性心不全につながり得る疾患が書かれている対象者を事業所スタッフに抽出してもらい、それらの対象者の看護・介護記録、ケアプラン内容を、調査時からさかのぼって5年分プリントアウトし、データとした。研究者3名がそれぞれデータに目を通し、2人ペアとなってカテゴリーを抽出した。

(倫理面への配慮)

名前、生年月日等の個人情報を含む部分が含まれている場合は、事業所スタッフに黒塗りしてもらい、仮名加工情報として研究代表者が事業所代表者から提供をうけた。研究者は、慢性心不全につながる心疾患および慢性心不全と診断された以降のケアプランおよび看護/介護記録を名前および生年月日等の個人情報を含まない状態にして事業所に持参するスキャナーでスキャンし、事業所と同じIDをふり専用パソコンにパスワードをかけて保存し、データとした。データの提供をうける際には、仮名加工情報の提供依頼申出書を交わした。

C. 研究結果

これまでに、【療養意欲の向上に関連した看護職・介護職の声掛けや問いかけの記録】、【療養者が語る病みの軌跡につながる記録】、【療養指導の実際】、【再入院にならないための指導(支援)アプローチの方法】、【普段と異なる症状に気づいた際の判断や実際にとった行動】、【多職種連携に関する記録】といった看護実践の枠組みが抽出された。

以下に、実際の記録から得られたコードを<>、コードから抽出された看護実践を「」、看護実践の枠組みを【】で示す。【療養意欲の向上に関連した看護職・介護職の声掛けや問いかけの記録】では、孫の結婚報告に対し、「注意することはたくさんあるが、結婚式に行けるように元気にいきましょう」という声掛けから「明確な基準のない声掛け」や「療養生活の目標を共有」といった看護実践が抽出された。また、【療養者が語る病みの軌跡につながる記録】においては、「妻より、「散歩行ってきてもあまり疲れたと言わないようになった」など「家族が捉える療養者の発言の変化を捉える」看護実践、また、「調子が良かったら焼肉食べてきていいかきくと笑顔で話される」など、「話される表情や意欲につながる内容について記録に残す」という看護実践が抽出された。【療養指導の実際】では、「排便が2日なければセンノイド服用」といったように「基準を明確にした服薬指導」が抽出された。さらに、「利尿剤中止基準の体重を下回るが、「61キロ台でも体を慣らすためにしばらく利尿剤をのむ」ことを本人と息子の希望を聞いて了承する」といったように、「患者・家族の希望を踏まえた判断」が抽出された。【再入院にならないための指導(支援)アプローチの方法】では、「話を聞くうちに、コーヒーや豆乳など400mlは別にとっている」など「水分制限が遵守できているかの確認」や「食べるのが早いのでゆっくり食べるように説明してほし

い)など「家族の訴えから患者の実際を確認」し、「苦痛の少ない食生活の工夫を提示」するなどの看護実践が抽出された。さらに、【普段と異なる症状に気づいた際の判断や実際にとった行動】では、〈妻より、「最近しんどいというのが気になる」ということに対し、立ち上がってすぐに歩いているため深呼吸してから歩くように説明)など「症状緩和につながる生活上の工夫を説明」といった看護実践が抽出された。最後に、【多職種連携に関する記録】では、〈一包化になっている薬を利尿剤調整のため、一包化しないように薬局に伝える)など「確実な内服への支援」が抽出された。

D. 考察

地域で暮らし、介護保険サービスを利用している慢性心不全患者のケアプランおよび看護/介護記録からは、病棟とは異なる看護実践が抽出された。例えば、専門職として患者および家族の療養生活や人生に寄り添う声掛けが抽出された。また、Faxや連絡シートなどの書面を通じて、かかりつけ医や多職種との情報共有がなされていた。

E. 結論

今回の分析では、慢性心不全患者に対し

て、病棟看護とは異なる地域における在宅看護実践が抽出された。【療養意欲の向上に関連した看護職・介護職の声掛けや問いかけの記録】や【療養者が語る病みの軌跡につながる記録】からは、患者と家族の生活や人生に寄り添った長期的な見通しをもった看護実践が提供されていることが明らかとなった。

F. 健康危険情報

(総括研究報告書にまとめて記載)

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし